Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

147

草木染めとはた織りの教材化の考察　第一報

○芹沢澄子（銀嶺幼稚園）　安保貴子（銀嶺幼稚園）

1　はじめに

ア．本園では、建学の精神の中心である「生きている限り個性的、創造的でありたいと努力続ける自立的人間の根っ子を幼児期に育てるために、モンテッソーリ教育法に早くから着目し、1989年よりモンテッソーリ教育を導入した。

幼児の理想像と保育の目標の一つに「自分で課題を発見し、ひとりでも又友達とも考え、手足を使い、創り、解決し、表現することを喜ぶことができる」を据え、日々実践に努めている。

イ．モンテッソーリは、人間の発達を３つの時期に分け、誕生から６才までを第一期、この第一期が更に０才～３才までを幼年前期、３才～６才までを幼年後期と分けている。この幼年後期の３才～６才までは「手で世界を捕らえる」時期であり、前に獲得したものを完成させる時期でもある。「子どもは環境を意識的に征服して本物の期に入り、そこでの経験は、ただの遊びでもなければでたらめの行動でもなく、成長過程の作業となる。またモンテッーソリ教育の実践は、日常生活、感覚、数、言語、文化に分けられている。日常生活のプログラムの中に、環境への配慮として「指先の洗練」編む、織るという作業があり、教具にははた織り機がある。現実にはたおり活動は、日常の生活の中で子どもたちが特に好む活動であり、性差や季節性もなく熱中する作業であるといえる。

ウ．1993年11月、福岡市博多区の雀居遺跡から、縄文時代晩期の日本最古の紡織具を発掘したと福岡市教委が発表した。これまで国内で発見された、弥生時代の紡織具より一世紀以上古く、市教委は「稲作技術とともに大陸から伝来した可能性が高い。日本の織物の起源を知るうえで貴重な資料」としている。いいかえれば、日本人にとって織物との付き合いは、2500年近くを経ていることになり、衣、食、住の営みの中で日本の文化の形成に重要な役割を担っていたことを確実に示す証拠ではなかろうか。

エ．本報告では、子どもたちの生活環境の中に位置づけられている教材、教具の中のはたおりの活動、はたおりに用いる繊維材料の自家製草木染めへ発展する過程を実践し、その教育的価値を探りたい。

昔から世界中の人たちは、草や木を使って衣服を染めてきた。土や貝などの外、ほとんどが草木の葉、花、実、根、それに木の皮や小枝、幹を使って染めてきた。幼児が自分の好みの色や模様を衣服や道具にもとめるのは不思議はない。方法と手段さえ理解すれば、描画と同様楽しい創作活動であるばかりか、自然とのつながりの不思議な営みを知る刺激に満ちた経験であるからだ。

2　研究調査のための準備

ア．大人と子どもが、それぞれのアイディアと技能を補い合い活動することにより、親子のふれあいと楽しい文化伝承の場として、草木染めとはたおり活動を活用する。草木染め、はたおりについて学習、実習を繰り返し、園内に染色場、はたおり場を設ける。

イ．保育の中で用いられる素材（毛糸・綿糸・絹糸それらのより糸他）を市販のものに求めてばかりいないで身近な染材から、好みの色や、意外な色に染めて、より豊かで選択的色彩を作品に導入することを教師間で提案する。

ウ．教師たちでいろいろな色を自然の中から選ぶことや、つくりたいと思うなかで、たまたま旅先で草木染めの作品を一回二回と見たことがきっかけで始めた。はじめは、一番身近にある玉ねぎの外皮を使用、黄土色に染まる。つづいて紺屋藍、ピラカンサス、黄はだ、すおう、どんぐりの皮、ぶどうの実の皮、ねむの木など染める。1993年11月３日の造形展には、草木染めによる作品を中心に製作、展示が行われた。

［作品例の一部］

玉ねぎの皮……タピストリー
みかんの外皮……壁かざり
すおう　……しぼり染めハンカチ（個人用）
藍　……壁かざり（花火の模様をしぼり染めする）

以後、はたおりに使う毛糸は、自分たちの手で染め上げた色でやることとなる。

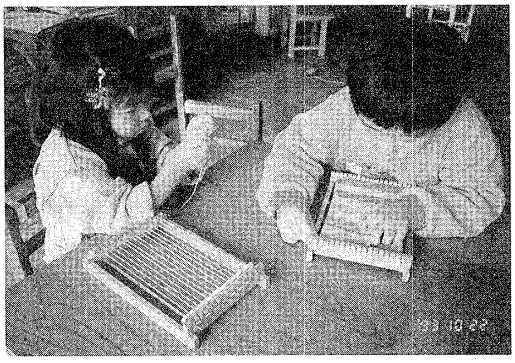
そして、年長児は卒園製作として、個人作品の壁かざりの布をみかんや玉ねぎで染め、刺繍をして完成させた。

NII-Electronic Library Service

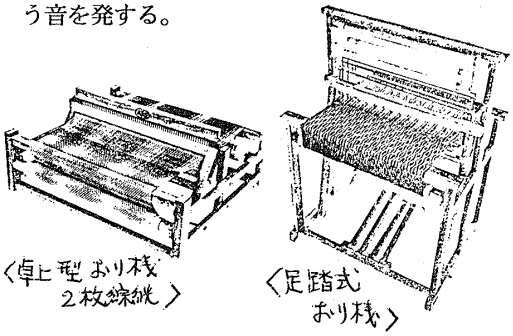
Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

エ．はたおり機とはたおり活動

(1)教具として現在子どもたちが使用しているはたおり機は、縦25cm×横18cmの木製のもので、両サイドのたて糸に沿って金棒を備えたものである。木枠にたて16本のたて糸をはり、さおに好みの毛糸を適量巻き左右交互に往復させて編む一段づつ終えるたびに櫛を手前に引き揃え整えていく。よこ糸をとり変えることで模様、形が形成できる。出来上がり寸法は20cmほどの長方形状となり、作品としては、ポシェット、ティッシュ入れなどに仕立て実用品として役立て楽しんでいる。（写真①）



(2)卓上型おり機は、外形が、幅63cm　奥行54cm、織幅48cm、総丈３mまで織ることができる平おり専用機である。平行に最大100本の経糸を並べ緯糸は２枚の綜絖枠がつくる間をくぐらせる。本機は、(1)に比べ、はるかに大きな布が手早く織れる。又、はた織り機らしい パタン という音を発する。



(3)足踏式おり機は、幅84cm×奥行62cm×高さ111cm織巾60cm、総丈15mまで織ることができる。椅子に腰かけて行うもので、(1)、(2)のおり機に比べ４枚の綜絖で行い、緯糸の長短で本格的な模様織りも可能である反面、子どもだけで織ることはむずかしく、主として大人が用いる。

オ．草木染め活動

(1)染料植物を家庭や野外から収集する。

(2)鍋に染料を入れ、水を加えて火にかける。煮立ってからさらに15分間煮る。

(3)ポリバケツの上にざるを置き、煮立った煮汁をあける。再び水を加えて煮立て、２番汁をとる。

(4)1.2 番汁を一緒にした染液を火にかけ、染める素材を入れて、かきまわしながら20分間煮染める。火を止めて冷めるまで待つ。

(5)媒染した素材を水洗いしてから、煮汁でもう一度20分間煮染めして火を止め、30分程そのまま煮汁に浸してきました。その後よく水洗いをして陽に干す。

(6)媒染について

媒染材を使い、色素を布によく吸収させたり、発色をよくするために必要なことで、みょうばん、鉄、銅、酸、石灰などを使って媒染液をつくる。媒染液により、染まる色が変わる。化学薬品を使わず自然のもので媒染液をつくることもできる。

カ．子どもたちへの働きかけ

(1)はたおり活動中の子どもたちへ、大人用のはた織り機で織ってみないかと誘う。

(2)教師や母親が大型はた織り機を使っている所を見学させる。

(3)草木染めによる糸を数種類見せて、草木染め活動へ誘う。

(4)草木染めによる糸ではたおりをする。

3　考察

(1)　教師集団が草木染め、はた織りに関し、魅力を感じ、その学習と実習の時間を費やしたことが重要な影響をもつことを知らされた。

(2)　教師の呼びかけに応じ、保護者の自発的参加が得られ、母親がはた織りの活動する姿を子どもたちに見せたことが、子どもたちに作業への取り組みが今まで以上に積極性がみられる理由と思われる。

(3)　草木染め、はた織りに用いる教材として適当な原料や機材が市販品を含め容易に入手できたことは、この活動を活性化することができた一つの要因となった。

(4)　子どもたちの実践、内容については第二報で報告する。

以上

NII-Electronic Library Service